日本における競泳の変遷と歴史的背景について

野　尻　奈央子 *

Changes and Historical Background of Competitive Swimming in Japan

Naoko NOJIRI

A changes and the historical background of the competitive swimming in Japan were examined in this paper. Beginning of the Meiji era, swim places appeared, and swimming races started. The competitive swimming progressed rapidly after transmitting the pool in 1907. The swimming changes in relation to the social environment and has evolved.

Recently, the number of participant of "Masters" and "Opening Water Swimming" increases. On the other hand, the competitive swimming of young swimmers person decreased due to the falling birthrate.

1. はじめに

戦前の日本では，現在のような水泳環境が整備されていないために，遠泳が盛んに行われた．しかしながら，プールの伝来により，天候などの気象条件に左右されず同じ水泳環境を整えることが可能になり，時代は運動としての水泳から競技としての水泳に移り変わった．これが近代水泳の始まりであり，さらに古来からの日本泳法に加えて様々な外国泳法を取り入れたことによって，水泳界は活況に向かった．このように日本の水泳界は，遠泳に始まり，競泳，近年では Open Water Swimming（北京オリンピックで新種目に採用）が加わるなど，時代とともに変遷し多様化している．

本論文では，日本における水泳界の歴史と変遷を社会情勢と併せて調べたので，報告する．

2. 明治期

2.1. 競泳の始まりと水泳場

明治初期から明治末期の間，隅田川では多くの水泳場があり，諸流派，とりわけ水府，神伝，向井流など名のある師範が水術を伝えていた．また隅田川においては，競泳（せり）があったことが以下の文から読み取れる．「流れに逆ひ一定距離或いは一定時間を各自得意の急泳法を以て競泳せしめるをせりみずという」[3]．

水泳の記録としては，明治6年に太田が隅田川横断80間を1分30秒という記録[2]が残っている．しかしながら，距離や時間の精度の信頼性は定かではない．また，太田[2]は明治11年に隅田川浜町河岸に水府流の水泳場を開き，諸流派の長所を取り入れ，水術の普及を目指し

* 教養部

た．しかしながら，当時，隅田川の流勢の変化が大きかったこと，様々な水述が氾濫し混合したことにより，術の定着が困難だったと記されている．その後，征韓論を唱えた西郷隆盛らによる兵乱など，外交内政が不安定となり，隅田川で栄えた水泳場はことごとく閉鎖された．

明治30年（1897），東京高等師範学校長である嘉納治五郎[6]は，その経営する造子会の塾生のための水泳場を開設した．これは将来教師を志す者は遊泳の心得がなくてはならないという主張があったからだと考えられる．しかしながら，この造子会を柔道講道館の範士である本田存が水泳の心得があると聞き，造子会水泳場の指導を本田存に任せたとされている．

2.2. 遠泳の始まり

現在の遠泳の形を確立したのは観海流と言っても過言ではないだろう．観海流は「蛙足の平泳ぎを基本とする団体泳」[5]と定義づけられている．また「長途の水上を遊泳して，目的の彼岸に達するものも比較的身体の疲労を覚えず，上陸の後労働に服し得る」と言われてきた．従って，遠泳は，エネルギー消費量が少なく，完泳を目的とするものであるとし，競泳とはかけ離れていると考えられる．

『遊泳童諭』の「平水遊の事」[9]には，「前に述る浮遊は法もなく唯子供の氣儘に初て浮遊くにて水心を知ばかり也さて平水遊といふは平水の遠程を遊くに水と和合て疲れざるの學ひ也其遊方世に様々有といへとも手操遊と号るを以て教る也其法は浮遊の其儘の體にて右を下にし横身に成右手を前へ長く伸進め水をかき流し左手を前へ短く伸び進め水を受次てかき流し兩足を操る姿勢糸をたくるが如しすへし兩足も手につれて交々水を拍合て踏行也かくの如く手足を運動して遊くこれを平手操遊をいふ此遊の理方は水中にて右手を差出とき其手に水障るゆる左手を以て水をかき其氣勢を以て水障る所を助くる也また左手を差出とき其手に水障るゆる右手を以て水をかき其氣勢を以て水障る所を助くること上の如し如此左右の交々助合手を伸へ手を縮め水をかき流し體を伸行也又體足を横に沈めて遊くは如此すれは頭首眞直に成呼吸に障らぬ理方也此遊體勢手足の伸縮水と一和し心氣安静にして遠程を遊濟り疲れざる肝要とする遊にて追々上達するに應して遊場を出て海河の廣く深き水に馴し凡五六拾間程遊行る々を列等に進む其間數子供ゆへ短し次に諸等も同断なり」と記載されている．これより，平水遊は体力の消耗を極力抑える泳法であり，遠泳に適していると読み取れる．また，横身になり，どちらかの手を前方に伸ばし，両足を伸ばすことから，現在の横泳ぎとして捉えることができる．

「鴈行韻圓列遠遊の事並鴈行圖」[10]には，「列等の人数を集めこれを一行にし其人と人のあいだを貳間程あけて水面の廣きところを遲速なく眞直に列を正して人数遊濟るを鴈行という又水面の狭き所にては其人数同断にして圓く渦巻ように列數度遊廻るを圓列といふこの圓列鴈行は多人數に遲速なく一様に揃ふる引立也又平水の遠程を遊濟るは行列遲速に拘はらす平水遊にて人々の氣儘に遊濟る是を遠遊と云也」とある．前文より大人数を集め，行列の速度に拘らない団体遠泳を行っていたことが読み取れる．

『踏水訣（水練早合点）』では，「遠およぎの事」[11]として，「一遠く拾丁二三拾丁も遊んと思ふときは始より遊出しに心得あり尤此遊は達者におよぎ得ての事也始遊出しに随分手足和ら

かに水をつよくふまず手も強くのびに心がけず始より草臥たる時遊くやうに手足をつかふなり此心得にて遊ときはのび遲けれども二三十丁壹里餘も遊もの也遠遊と心得てはやく遊つかんとして始より手足をいそぎ遊ときは中比にて草臥それより遊の手もいでぬもの也遠遊の時ははじめよりくだぶれたるときのやうに遊出すがならいなり」とあり，スピードは遲いが楽に長く泳ぐと言う意味で「遠泳」に適していると考えられる．この「遠およぎ」という言葉は古くからあり，時代と共に「遠泳」と名を変えた．

「連遊の事」[12]では，「一此遊のとき師の心得あり平日弟子中遊の位を見立置水にのびのじはやきと遲きとあり次第を極めて遊ゆく間々の延ちぢみのなきやうに行事に遊ことなり先に立て遊く人を平日遊のむらなく遊くものを先に立ておよがんせずと功者に達者なる自由におよぐものを跡に立るが師匠の習ひ也さなければ先を見合わせ遊ものゆへ跡に立るもの水自由になければ先に遊ぐ人に合せ遊く事行事くずれさる様にならぬものゆえ揃遊はだんだん跡に立人を功者を立るか能遊の揃ふものなり此揃およぎは艶遊の手にいらさるものは遊の數に入ずして能遊者斗を遊がする事也揃遊は一人一人の遊の達者をすて惣遊一同の手の出入するを善とする事也」とある．これらは遠泳に着眼しており，できるだけゆっくり遠く疲れずに進む泳法である．つまり，遠泳は，常に顔が上がっている状態を保てる平泳ぎや横泳ぎなどを用いることが多く，これは団体の安全確認をしながら同じペースで泳ぐために有益な泳法であると考えられる．

2.3. 海での競泳の始まり

1905年，大阪湾にて海での競技大会が開催[7]された．これが現在のOpen Water Swimmingの原型であると考えられる．明治時代の「遊泳」は河川などを渡ることや，流れに逆い競い合うことであり，「遠泳」は隊列を組み，縦横揃えてゆっくり進むものであった．それに対し，この海での競技は，「遊泳」と「遠泳」と組み合わせたものと考えられる．以下の文章は，当時の状況が鮮明に読み取れる．

海上十哩　大競泳　築港出発の光景（前略）．

この日波静かなりしが，曙より薄雲をかけし天は午前七時過ぎより雨を催し，一点二点衣を打つに，中には心配するものもあり，準備に意外の時を費したるはやむを得ざることなりし．午前八時，桟橋上に整列せし楽隊の嘹喨たる奏楽とともに，選手二十八名は徐々と各々その標旗の船に乗り込み，順次出発して北突堤の外に出ず．旌旗翩翻として風になびき，舳艫相啣んで堂々たる有様，勇しなんどいうばかりなし．かくて一行は司令船の周囲に集合するや，選手の面々は衣を脱ぎて赤裸々となり，油を全身に塗り身体を屈伸する等用意を整え，いずれも猿股，腹帯にしっかと身を固め，隆々たる両腕の筋肉さながら仁王のごとき姿勢にて，司令船の前に整列するを待ち，川地審判委員は更に繰り返して懇ろに競泳の細則を説示したり．これより先，出発点は北突堤の側なる浮標より船に一直線に縄を張り，各選手を背の方より縄に取りつかしめて，号砲により発泳せしむる設備をなしたり．審判委員の説示は終わりぬ．一発の号砲は轟けり．選手は抽籤の順位によりて水中に飛び込みたり．

一人また一人，偉大なる，長大なる，短小なる，小じんまりしたる，しっかりしたる，いず

れも水中を行く陸を行くがごとき海国の快男児，頭に戴く二十八個の五彩の帽はやがて一条の縄に直線に整列す．第二号砲は轟けり．選手は出発の用意をなす．次いで第三号砲は更に高く轟けり．二十八個の彩帽は一斉に揺ぎ出でて，たちまち海上に浮かびたり．（中略）
決勝点の光景　二時，雨やや晴れ雲の切れ目に日の光見え初むるや，魚崎附近に群衆せる十数万の人と数百隻の船とが歓呼は，海を伝うて選手が耳に達するなり．杉村氏は莞爾として，十分余裕を蓄え置きしその泳力を徐ろに加えつつ一泳一進，白地に紫の十字旗は幾多の栄誉を表彰しつつ，同四十八分，決勝点に達し，古希臘の彫刻にも比すべからん体を起して，海中より帽を振りつつ岸に上りし時は，百雷の一時に落下するがごとく，屋根の上，海の中待ち受けたる観客は狂叫，雀躍するなりき．実に海上十哩競泳の最優勝として，はた我が海国の猛士として，東京法科大学生杉村陽太郎氏は，ここに見事なるその月桂冠を得たりしなり．杉村氏は実に出発（八時四十分）の後，九時二十分より決勝点に入れる二時四十八分まで，常に先頭を継続せしめものにて，氏が十哩競泳に費せし時間は六時八分なりとす．（中略）
　決勝点到着者．
第一着（二時四十八分）東京法科大学生　杉村陽太郎，
第二着（三時八分）大阪　水泳教師　沢田定吉，
第三着（三時十二分）京都　商船会社員　金子宗吉，
第四着（三時四十四分）京都第一中学生　篠田行蔵（中略）
賞品;第一着　金三百円　外に特製金メタル一個，第二着　金百円　外に特製金メタル一個，第三着　金五十円　外に特製金メタル一個，第四着　金二十円　外に特製金メタル一個，第五着以下　財嚢並びに金メタル一個ずつ．ただし半途にして中止したるものはその賞に入らず．

2.4. プールの到来

明治末期から大正期にかけて水槽型の近代的プール時代[13]を迎えた．明治30年に第一回アテネオリンピックが開催された頃は，自然環境下における試合であったため，水温摂氏12度という悪環境下で参加国はわずか6カ国であった．その頃，ヨーロッパではかなり立派なプールが存在していたが，オリンピック開催においては第1回から3回までプールで行なわれなかった．1908年，ロンドンで開催された第4回目のオリンピックは全長100 mのプールが特設され，プールで競技した最初のオリンピックとなった．

日本では，明治40年に東京勧業博覧会会場に7.2 m× 14.5 mの室内プールが設置された．その後，大正6年に東京神田美土代町のYMCAに始めて室内温水プールが設置された．コースは20ヤード（約18メートル）であったが，ここで東大一高の学生が中心となって競泳の練習が行われた．プールでは競泳練習・試合のみならず，日本泳法が披露される場でもあった（昭和15年，神宮外苑にプール，水府流太田派）．なお，それまでの水泳場では，杭や丸太，浮標等によって区域が示されていた．

3. 大正期

極東および世界オリンピック大会の刺激を受けて，水泳界は急激に変貌し競泳第一主義[1]となる．第1回学生水上大会の参加校は立教・慶大・明大・早大・一高・東京薬専・拓大・東京高師・東大農学部・長崎高商・東京高工の11校であった．当時，YMCAでバスケットをする傍ら，水泳をしていた野村憲夫は第1回から出場することが大切であると判断し，本井巧と共に出場した．優勝は16点を挙げた明大であった．本大会競技場にはコース・ロープも無く，プールの底にコース・ラインも無かったため，他コースへはみ出す選手もいて着順に混乱もあったり，多少のトラブルもあったが大会は大成功であった．

この大会開催を境に，各大学水泳部は猛練習を始め，併せて有望選手の獲得に乗り出し水泳界は活況に向かっていく．この大会は，第3回目から新聞社主催を離れ学生連盟で運営されるようになった．当時，水泳師範や水泳場主宰の多い体協水泳部から，この学生大会の中止運動も行なわれるような中で，参加者がどれだけ集まるか判らない状態であったにもかかわらず，万朝報記者であった鷺田成男が発案し，開催にこぎつけた功績は高く評価されている．この学生競技の開始は，後の日本水泳界にとって大きな意味を持つものとなった．

4. 昭和

大正末期から昭和初期にかけて，観海流の免許状を得るものが極端に減少[5]した．これは明らかに近代スポーツによって競技化が進んだからと考えられる．しかしながら，昭和14年(1939)，軍事の要請を受けて厚生省指導の下「壮丁水泳訓練」が始まり，昭和16年の『国民学校令』では，水泳が必修となった．同時に，日中戦争を契機として，プールでの競泳が否定され，海洋での団体遠泳や実用的な泳ぎが求められるようになった．観海流の道場は，昭和19年まで維持したが，戦局の悪化で閉鎖となり終戦を迎えることとなった．

昭和初期には，遠泳ブームが訪れたが，戦争とともに衰退していった．日本泳法，遠泳というものが，近代化とともに廃れてきた．昭和期に入り，最期まで免許状を出していたのが観海流である．従って，日本人は「海などの自然環境下で長距離泳ぐ」[9]イメージを「遠泳」と想定してしまうのではないかと推測される．

5. おわりに

日本における競泳の変成と歴史的背景について調べた．日本では，明治に水泳場と呼ばれる水泳施設が登場し，同時に競泳が始まった．当時は，規定された泳法はなかった．その後様々な泳法が提案されるとともに，海での遠泳が始まった．明治40年にはプールが伝来し，水泳界は急激に変貌し競泳第一主義となった．その後，水泳の競技化は更に進行し，遠泳ブームもあった．昭和の戦時の混乱により遠泳は衰退したが，近年になってOpen Water Swimmingとして，トップの選手の競争のみならず一般参加者は水泳競技を楽しんでいる．このように，競泳は社会情勢とともに変遷し，進化し，多様化してきた．

近年，マスターズやOpen Water Swimmingへの参加者は増加傾向にあるものの，少子化な

どによって若者の競泳人口は減っている．今後，競泳に関する歴史や泳法などの知識を広く公開し，日本の水泳界の活性化に貢献するとともに，特に競泳選手を目指す若者には，室内の競泳に留まらずOpen Water Swimmingも含めた広い視野から競技を理解してもらいたいと願う．

参考文献

1) 石川芳雄（1960）日本水泳史．米山弘発行．p113.

2) 長谷川武（1990）大日本遊泳術．日報通信印刷．pp.14-17.

3) 高橋雄次編（1919）増補改訂大日本遊泳術．水交会．pp.20-26.

4) 高橋雄次郎編（1900）日本遊泳術．造子会．序 pp.1-3.

5) 山田謙夫（2008）観海流の伝承とあゆみ．伊勢新聞社．p21-82.

6) 真田久，椿本昇三，高木英樹（2007）嘉納治五郎による水術再編に関する研究．体育学研究.

7) 大阪毎日新聞（1905）100年前（1905年　明治38年）の出来事と今ー『近代日本総合年表　第三版』．岩波書店．

8) 佐野清次郎（1968）遠泳ー指導法と海の知識ー．不昧堂出版．

9) 日本水上競技連盟（1937）日本水泳史料集成．古今書院 .p394.

10）日本水上競技連盟（1937）日本水泳史料集成．古今書院 .p395.

11）日本水上競技連盟（1937）日本水泳史料集成．古今書院 .p243.

12）日本水上競技連盟（1937）日本水泳史料集成．古今書院 .p245.

13）日本体育協会（1987）スポーツ大事典．大修館書店．p 467.

（平成20年4月4日受理）